

# センター試験 世界史B (本試験) 分析

## 全体概況

試験時間 60分

大問数・解答数	大問数：4題	解答数：36問
難易度の変化（対昨年比）	○ 難化 ● やや難化	○ ほぼ同じ ○ やや易化 ○ 易化
問題の分量（対昨年比）	○ 多い	● ほぼ同じ ○ 少ない
出題分野の変化	● あり	○ なし
出題形式の変化	● あり	○ なし
新傾向の問題	○ あり	● なし
<p>総評</p> <p>例年通り、テーマ史らしいリード文を用いながら広い範囲の小問を集めた形式をとっており、大問4題・解答数36という出題の分量も昨年と全く同じである。全体としては各範囲をバランス良く問うものであるが、西欧史の割合がやや減少した。それとともに、戦後史を含む出題が6題に増加している。出題形式では、昨年度は姿を消していた用語自体をそのまま選択させる問題が5題に増加した点が目立つ。また、写真を見せて唐三彩の名称を答えさせる問題が1題出されたが、特に難しいものではない。そして昨年は1題のみだった地図問題は2題となり、昨年3題出された年代整序問題はやはり3題であった。一方、例年大部分を占める正誤判定問題については、2文の正誤組み合わせ問題が昨年の6題からさらに増えて7題となった。</p>		

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第1問	世界史における「死の文化」	25点	センターらしく、古代オリエントも含めて幅広い範囲からの出題となっている。しかし、誤文のポイントがやや細かい正誤判断も含まれ、またルネサンスに関する年代整序問題など、受験生からすると意表を突いた問題が複数入っている。
第2問	世界史上の国境	25点	幅広い範囲の中で、近現代史にやや比重をおいた大問。その中で、C-問7の中越戦争など、受験生にとっては学習の手が回りづらい事項も出題されている。また、C-問8で琉球王国の両属体制を扱うという、近年らしい出題があった。
第3問	世界史上の経済政策	25点	幅広い範囲設定・出題形式の多様さ・正誤のポイントの難易度など、例年のセンター試験らしい非常にオーソドックスな大問である。地図問題も1題(B-問4)入っているが、非常に平易な内容である。今年度ではもっとも高得点を狙える大問であろう。
第4問	世界史上の言語	25点	A-問1で台湾出兵を扱い、A-問3であえて文学革命ではなく新文化運動の用語を用いるなど、近年の教科書や入試問題の動向をよく反映している点が目を引く。その中で、B-問4におけるインドの言語の系統・問5におけるムガル帝国の公用語など、受験生の学習の手が届きにくい内容が含まれているため、難易度のやや高い大問となっている。